

## まえがき

僕は以前、「ガンガン叱る先生」でした。「叱ること」がよくないなんて当時もわかつていましたが、「叱ること」をやめられない、そんな先生でした。

だから、この本は僕の「懺悔本」です。過去の「叱り続けた」自身の指導を悔やみ、そして「叱ること」を脱却できつある僕自身の話です。これは、誰かを責めているわけではありません。ただ、この本を手に取ってくださった方が「叱ること」について悩んでおられるのならば、本書で、教師も子どももラクになり、「叱る」シンが激減する方法をいろいろ紹介していくので、思考の枠がぐんと広がることによって、その気持ちが少しでも軽くなることを願っています。

どうして先生たちは子どもたちを叱ってしまうのでしょうか。その理由の一つとし

て、僕は「学級崩壊への恐れ」があるのではないかと考えています。学級崩壊という言葉が生まれてからというもの、多くの先生たちは学級崩壊を恐れるようになります。いわゆる、「指導力の高い先生」でも学級崩壊を起こしていく現状を、僕は何度も見聞きしました。

「子どもたちが言つことを聞かない状態」を学級崩壊とするのならば、子どもたちには「なめられてはいけない」と考える先生がいても不思議ではありませんし、過去の僕はそのような考えに支配されました。このように書いてしまうと、僕のクラスの子どもたちは年中、僕の「叱り」による恐怖で支配されていたような状態をイメージされるかもしれませんが、決してそうではなかつたと思います。

端的に言葉で表せば「締めるところは締める」といったイメージです。基本的には楽しいクラスだけど、間違ったときには「叱る」といった、現場ではよくあるようなクラスだったと思います。その何がいけないのだと思われる先生もいるかもしれません、僕はそのやり方で失敗したことがありました。

詳細はこのあとこの本編でも書きますが、**子どもたちによる「圧倒的な反発」に対しても先生の「叱る」が機能しなくなるのです。**いやむしろ、「叱る」ことで悪循環さえ生み出してしまう。僕はその悪循環にハマってしまい、結局、一人の男の子を教室に入れなくし、その子を校長室登校にさせてしました。

「叱る」という行為の持つエネルギーの強さを実感した瞬間でした。それは「叱られた」子どもたちと、「叱る」先生の心を追い詰めていきます。

「叱る」という行為が教育上必要だという意見はまだ現場には根強いと思います。「叱らないといけない」ような場面は存在するし、そのような場面で「適切に叱る」ことが子どもたちを正しい道へ導くのだ、と。

しかし「適切な叱り方」とは何なのでしょうか。現場では「怒鳴る」も「怒る」も「叱る」も混同している先生がたくさんいます。仮に「適切な叱り方」が存在したとして、どれだけの先生がそれを運用できているのでしょうか。

現実問題として「適切な叱り方」を運用できていない先生が多いのならば、僕は「叱る」という言葉を学校教育の世界から、いつたん退けておくという選択肢があつてもいいと思っています。

これは「体罰」問題にも通じると考えています。この世界のどこかには「適切な体罰」を運用できるような人が存在するのかもしれません。そこには「愛」やら「信頼関係」やらが作用しているのでしょう。でも、だからといって「体罰」を学校教育に取り入れようとは絶対になりません。

「叱る」だつて「暴力」と同じくらいのエネルギーを持つっています。6歳から12歳の子どもたちが「叱る」という名目で、大人である先生から「叱られている」。僕は当事者としても傍観者としてもそんな現場を数多く見てきました。

さらに言えば、「叱られた」という指導の「教育効果」についても、僕は懷疑的です。子どもたちは果たして「叱られた」ことによって「自分の行動を省みる」ことができているのでしょうか。

子どもたちは、「叱られた」ことによって「反発」したり、「無気力」になつたりと、先生側が望むような「教育効果」が子どもたちの内面に生まれていないのではないかと考えています。子どもたちの「自省」を促すためには、「叱る」よりも「教育的効果」の高い方法があるのではないでしょうか。

教育の現状はすぐには変わらないかもしません。それでも「叱る」という指導について、学校教育の世界に一石を投じたいと思います。なぜなら、僕自身が「叱る」によつて苦しみ、また、子どもたちを苦しめてきてしまつたからです。

子どもたちが安心して学ぶことができる場所をつくるためにも、学校教育における「叱る」の在り方を問い合わせたい。そんな気持ちで一所懸命に書きました。どうかお読みください。では、またあとがきでお会いしましょう。

めがね旦那

## クラスに「叱る」は必要ない！ もくじ

まえがき



### 叱るとクラスはうまくいくのか？

荒れたクラスを抑えた先生  
僕と5人組の戦い  
力のぶつかりあいは敗者を生む

22 19 16

3



### 「叱らないですむ」クラスをつくるために

子どもはすぐに変わらない  
教室は毎日違うところ  
働きかけは子どもよりも環境

31 29 26



### 叱り方の神話に縛られない

有効な叱り方のパターンはあるのか？

39

「叱る」をめぐる神話①

「怒ると叱るは違う」

「叱る」をめぐる神話②

「なめられてはいけないから叱るべき」

「叱る」をめぐる神話③

「叱れば子どもはすぐ変わる」という期待

「叱る」をめぐる神話④

「放つておけないから、

愛情があるから叱るのは当たり前」

「叱る」をめぐる神話⑤

「基準を設けて、基準を超えたたら叱るべき」

「叱る」をめぐる神話⑥

「社会に出たとき困らないように、

叱られる」とへの耐性をつける」

「叱る」「ことの副作用——叱るは「叱るの連鎖」への入り口

結果として子どもの復讐心を正当化してしまうという副作用

叱られないために「何もしない」無力さを学ぶという副作用

51

50

48

47

45

## 第4章 叱るよりも明らかにうまくいく方法

「先生は怒ると怖い」よりも、「君たちは自由だ」と伝える

「忘れ物指導」をしなくてよくなる方法

①毎日忘れがちな学用品は持つて帰らせない

②家庭への配布物などはランドセルに一緒に入れる

③家庭から持つて来る物は「直前に言わない」「あらかじめ家庭へT E L」

授業中に叱らなくなる方法

①課題が終わらないなら定量制から定時制にする

②授業中に集中していない子どもは叱らなくていい

③手遊びも実は叱る必要がない

90

86

80

79

76

71

65

60

56

愛情があるから叱るのは当たり前

④授業中のトイレは自由——子ども自身の自覚を待つてOK  
子ども同士のトラブルが少なくなる方法

①よくケンカする子どもたちには距離を取ることを教える

②いじめにつながりそうなときは加害児童とまづつながる

③当番活動などのサボリには人員の余裕で対応を

④給食指導、苦手なものは爪の先まで減らす

子どもと無理な約束をしなければ叱らないですむ

子どもに必要以上のしつけをしない

周りの教職員へのアピールとして叱るをやめる

子どもの心の動きをより深く学ぶ

先生がイライラしないことが一番大事

130 127 125 122 118 113 108 103 99 98 93

## 第5章

### 「叱る」より「諭す」とクラスはうまくいく！

まずはしっかりと出来事を受け止める——丁寧な事実確認を

感情を込めずに淡々と——怒りに注意

時間は短く——時間と効果は正比例しない

改善策を提示——ここが腕の見せどころ

メッセージではなくて、メッセージ

——「あなたは」ではなくて「私がどう思つたか」

教員側はすぐに切り替える

人格に対してもうく行行為に対して

ロジカル・ラスマント

149 148 147 145 144 142 140 137

第1章



# 叱るとクラスは うまくいくのか？

あとがき .....  
161

「叱る」必要のないシステムをつくる .....  
159

「叱る」ことで失うもの .....  
157

教師の言動をマネする子どもたち .....  
155

権威に頼らず、一人の人間として思いを伝える .....  
153

そもそも指導の目的は「反省を促す」 .....  
151

どうして先生は子どもたちを「叱って」しまうのでしょうか。

それがよくないとわかりつつも、それが負のスパイラルをつくっていると内心では気がつきながらも、「叱る」を続けてしまう。第一章ではそのことを考えていきたいと思います。と言つても、これは研究論文でも何でもありません。どこにでもいる普通の先生である僕が「叱る」をどのように考え、実際に「叱って」きて、そして失敗し、「叱る」から距離を置くまでの話です。

## 荒れたクラスを抑えた先生

少し僕自身の話をさせてください。

僕が新任で配属された学校は「単学級」の学校でした。これは、学年が1クラスしかない学校です。みんながよくイメージされる学校は、学年に2クラス以上あり、新任の先生や若手の先生は隣のクラスの先生に学級経営の手法や授業技術などを指導

してもらいながら仕事を覚えていくというものでしょう。

しかし、学生からそのまま先生になった現場経験のない僕は、右も左もわからないまま、隣のクラスに指導してくれる先輩教員もない状態で学校の先生という仕事をしないといけませんでした。

単学級の大きな特徴として「クラス替え」ができないことがあります。つまり、子どもたちのメンバーは変わらないまま、先生だけが変わっていくという状態です。これは学級での問題がそのまま翌年も引き継がれるということを意味しています。

当時、少し荒れ気味の学年がありました。授業中も静かにすることが難しく、休み時間にはいつも誰かがケンカをして、整列するにも時間がかかり、担任の女性の先生が声を張り上げて「叱って」も子どもたちには届いていないようでした。結局、その学年は1年間そのような状態が続きました。